

2025年10月総評 暮田真名

てんてんてんてんてんてんと
いう気持ち

——
鈴木雀

フキダシの中に「……」と書いてある、という漫画表現はよくある。それを真似て、口で「てんてんてん……」と言うこともあるかもしれない。しかし、「てんてんてんてんてんてん」と言うことはほぼない。絶句しているが、「てん」のリフレインが新たなりズムを生んでもいる。

泡立て器に囚われた
クリームを掬う
夜は長くても大丈夫

——
野城 知里

「夜は長くても大丈夫」とは、不思議な言い回しだ。クリームが泡立て器に絡む固さになるには、長時間混ぜ続ける必要がある。深夜、無心でクリームをかき混ぜながら、「大丈夫」と自分に言い聞かせているようだ。

スパツツは儂いからね絶対に
——
立田渓

「スパツツは履かないからね絶対に」という宣言が「スパツツは儂い」に誤変換された。読者は「スパツツの儂さ」というものを想像せざるを得ない。タイツやストッキングに比べたら厚手のスパツツでも、比較対象によっては儂い。たとえば、いつでもスパツツを捨ててしまえる人間だとか。

口笛を無口が吹いて秋うらら
——
つちや

口笛の「口」は実景で、無口の「口」は換喻である。無口だからといって、本当に口がないわけではないのだ。物静かな人が見せたチャーミングさを軽やかな言葉遊びで捉え、のどかな秋の日を描いた。

Tシャツをめくって
おなかに入れてみる
ビーチボール、ほんの出来心で

汐見りら

ビーチボールをTシャツのなかに入れる。ようするに妊婦の真似をしていて、遊びだからいいのだけれど、わざわざ「ほんの出来心で」と付言されると不安になる。下の句の座りが悪いのも、ふわふわと弾むビーチボールのようで効いている。

真っ二つ化石になれば気持ちよく

空いう子

生きているあいだは、「真っ二つ」にされたら痛い。痛いどころではなく、死んでしまう。しかし、死んでから長い時間が経って、化石になってしまえばどうだろう。読者は自分が化石になって真っ二つに割られるまでのタイムスリップをする。

残念、いて座のあなたは
大人になれないでしょう

タルミフミヤ

テレビの星占いを思わせる口ぶり。「大人になれない」は長期的な予言、呪いのよう。しかし、「大人になる」は「他人に譲る」というような、精神的な比喩表現としても使われるから、呪いではないのか。一瞬、ギクッとする。

遺跡をゆく
浴室でしか
触らないところのほうが
多い身体で

――
小川 未夜子

遺跡の内側と自らの身体を重ねている。そう思うのは、なんなく暗がりを手探りで歩むようなイメージが遺跡にはあるからだ。遺跡の壁に触れること、自分の身体に触れること。遺跡の一部になるような感覚。

広大な朝食会場にある檻

――
小野寺 里穂

肉食をする場合、広義の檻の中にいた動物を食べるのだから、朝食会場に檻があるのはそれだけで心地が悪い。「広大な」が「檻」にかかると考えれば、檻の中にいる人間、という『注文の多い料理店』の世界観を読み取ることもできる。

朝が来るたび孔雀が喉につまる

――
千葉羅点

朝が来ると鶏が鳴く……という表象がある。この句では事態が遙か先まで進んでいる。喉から声を出そうとするのはわたしであり、しかも、孔雀という大きな鳥が詰まって声が出ないのだ。朝を迎える苦しさが伝わる。